

平安京右京一条三坊三町跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京一条三坊三町跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび建物新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

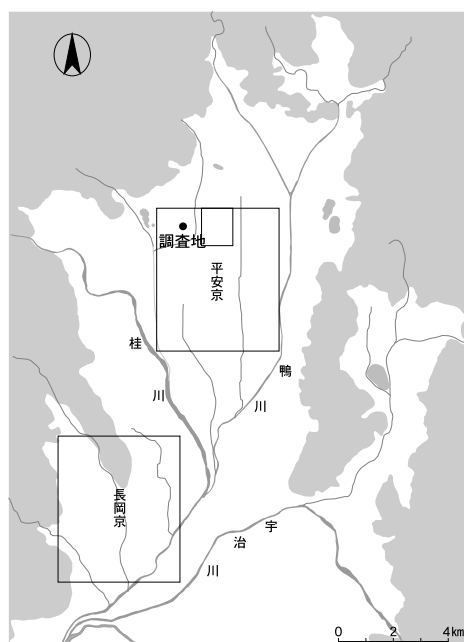
平成19年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京右京一条三坊三町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区西ノ京大炊御門町地内 |
| 3 委 託 者 | 支出負担行為担当官 京都労働局 総務部長 弓 信幸 |
| 4 調査期間 | 2006年10月12日～2006年12月22日 |
| 5 調査面積 | 約392m ² |
| 6 調査担当者 | 能芝妙子 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。ただし、建物・柵については遺構別に番号を付した。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 能芝妙子 |
| 18 編集・調整 | 児玉光世 |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	4
(1) 層序と遺構の概要	4
(2) 第1期の遺構	4
(3) 第2期の遺構	8
(4) 第3期の遺構	12
4. 遺 物	13
(1) 遺物の概要	13
(2) 出土遺物	13
5. ま と め	17

図 版 目 次

図版1	遺構	1 調査区東半全景（西から）
		2 調査区西半全景（東から）
図版2	遺構	1 建物1（東から）
		2 建物3（南西から）
図版3	遺構	1 建物5・柵3（南から）
		2 建物4（北から）
		3 建物6（北から）
図版4	遺構	1 柵1・2（北から）
		2 土壇23（北東から）
		3 土壇235（西から）
		4 土壇300（北西から）
図版5	遺物	土壇23・235出土遺物
図版6	遺物	土壇300出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	四行八門と遺構概念図（1：1,500）	2
図3	周辺の主な調査位置図（1：5,000）	2
図4	調査区配置図（1：400）	3
図5	調査前全景	4
図6	作業風景	4
図7	調査区遺構平面図（1：150）	5
図8	調査区北壁・東壁断面図（1：100）	6
図9	建物1実測図（1：100）	7
図10	建物5実測図（1：100）	7
図11	柵3実測図（1：100）	7
図12	建物6実測図（1：100）	8
図13	建物2実測図（1：100）	9
図14	建物3実測図（1：100）	10
図15	柵1実測図（1：100）	10
図16	土壇23実測図（1：10）	10
図17	土壇235実測図（1：10）	11
図18	土壇300実測図（1：10）	11
図19	建物4実測図（1：100）	12
図20	柵2実測図（1：100）	12
図21	土壇23出土土器実測図（1：4）	13
図22	土壇235出土土器実測図（1：4）	14
図23	土壇300出土土器実測図（1：4）	15
図24	土師器甕内検出の粒状不明品	15
図25	その他の遺構出土土器実測図（1：4）	16
図26	建物変遷模式図（1：500）	17

表 目 次

表1	周辺の主な調査一覧表	3
表2	遺構概要表	4
表3	遺物概要表	14

平安京右京一条三坊三町跡

1. 調査経過

この調査は、京都上労働基準監督署の新築工事に伴うもので、調査地は京都市中京区西ノ京大炊御門町地内に所在する。平安京の条坊では平安京右京一条三坊三町に該当し、町内の東を道祖大路、西を宇多小路、南を勘解由小路、北を近衛大路で区切られていた町で、調査地の南側は勘解由小路に面している。これまでに実施された周辺の調査では、平安時代前期から中期にかけての建物跡や土壌・溝などが確認されており、平安時代の生活痕跡が良好に残っている可能性が高いと推定された。

調査区は、排土を場内処理する関係から、西側部分と東側部分に分割して設定した。調査は西側部分を先行して実施し、平安時代の遺構の遺存状態が良好であることが確認できた。遺構検出中に建物跡の柱穴が北壁断面にみえたため、調査区北側を拡張して確認調査を行った。調査区を反転する際には西側部分で検出した建物跡の全容を明らかにするため、柱穴に養生を施した上で西側部分の埋め戻しと東側部分の掘削を行い、四面に庇がついた建物跡を検出している。

2006年11月18日に、委託者の了解を得て現地説明会を開催し、約220名の参加があった。



図1 調査位置図 (1 : 2,500)

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

当該地は平安京の条坊では右京一条三坊三町内の中央部の南端に位置し、1町を区画する「四行八門」制では東一行と東二行、北七門と北八門の4戸主に跨がっている。『拾芥抄』『西京図』には何の記載もなく、平安時代にはどのような土地利用がされていたのか不明であった。「西京図」には東に隣接する右京一条二坊十四町は「叙弘知行」と図示されており、京内の西と東に設置されてい

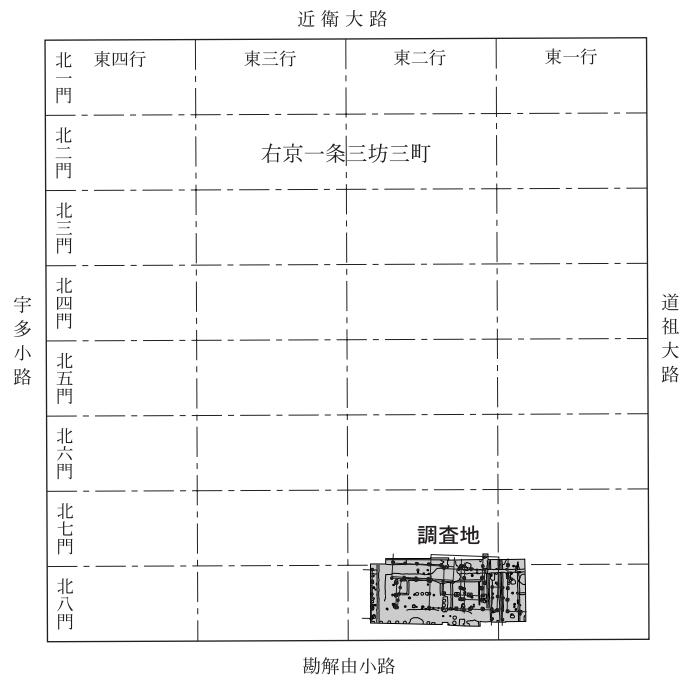


図2 四行八門と遺構概念図(1:1,500)

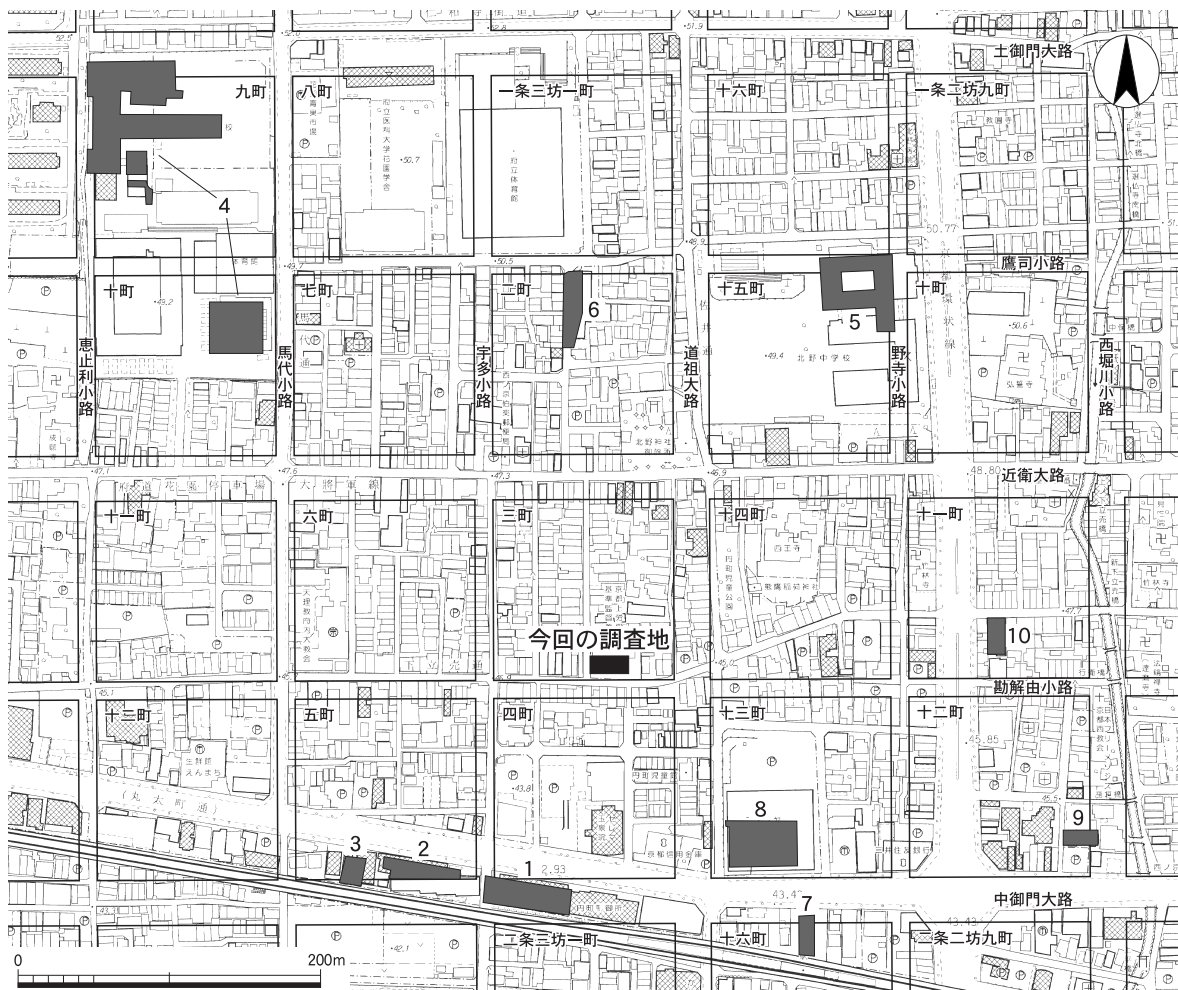


図3 周辺の主な調査位置図(1:5,000)

た獄舎の一つである西獄の役人の所領であっらしい。中世になると西京村の一部となり、北野天満宮に仕える麴造りを生業とする「西京神人」達が住んでいたと記されている¹⁾。

(2) 周辺の調査 (図3、表1)

右京一条三坊三町内での本格的な発掘調査は今回が初例となる。対象地の敷地内では既存建物の北東部分で立会調査²⁾が実施されているが、層序を確認しただけで遺構は検出されていない。しかし調査地の付近では、山城高校校内での京都府教育委員会による発掘調査や、当研究所による何例の発掘・試掘・立会調査などが実施されており、古墳時代の住居跡や平安時代の建物・土壇・条坊に関連する溝、中世の耕作溝などの遺構を検出している。

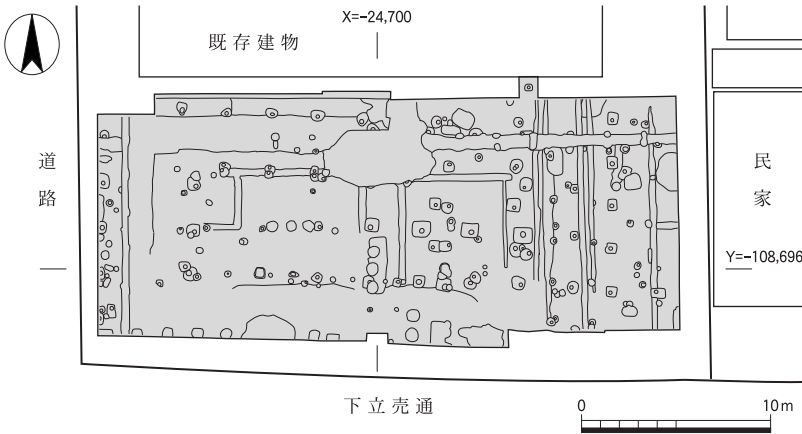


図4 調査区配置図 (1:400)

表1 周辺の主な調査一覧表 ※ №は図3の調査地点の数字と対応

No.	条坊名	所在地	調査概要	文 献
1	右京一条三坊四町	中京区西ノ京南大炊御門町1-2	平安時代の中御門大路側溝、井戸、自然流路。	『382 西ノ京南大炊御門町遺跡』『史料京都の歴史』第2巻 考古 平凡社 1982年
2	右京一条三坊五町	中京区西ノ京伯楽町22-4	弥生時代の溝。平安時代中期の建物、柵列、溝、土壇、ピット。平安時代中期以降の建物、柵列、溝、ピット。	吉崎 伸「右京一条三坊」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
3	右京一条三坊五町	中京区西ノ京伯楽町24	古墳時代?の溝。平安時代の建物、柱穴、土壇。室町時代の暗渠。江戸時代の溝。	辻 純一・平尾政幸「右京一条三坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
4	右京一条三坊九・十町	北区大將軍坂田町・右京区花園馬代町	平安時代以前の竪穴住居、建物。平安時代前期の建物、道路、柵列、園池、溝、土壇、井戸、柱穴多数。	平良泰久ほか「平安京跡(右京一条三坊九町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都市教育委員会 1980年
5	右京一条二坊十五町	中京区西ノ京中保町1-4	平安時代前期の流路、包含層。鎌倉時代～室町時代の溝、ピット、土壇、柵列。桃山時代の溝。	菅田 薫「平安京右京一条二坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
6	右京一条三坊二町	中京区西ノ京御輿ヶ岡町1-2	平安時代の鷹司小路南側溝、1町の中心溝、橋脚跡、埋納遺構、掘立柱建物、土壇。中世の溝。近世以後の溝、土壇。	久世康博・堀内寛昭「平安京右京一条三坊」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
7	右京二条二坊十六町	中京区西ノ京西円町3番地	平安時代の柱穴、溝、土壇、井戸。	南 博史ほか『平安京右京二条二坊十六町京都文化博物館調査研究報告第14集』京都文化博物館 2000年
8	右京一条二坊十三町	中京区西ノ京円町55-1	平安時代以前の流路跡、池状遺構。平安時代の土壇、井戸、柱穴、池、落込。室町時代の溝、柱穴、落込、耕作土層。桃山時代～江戸時代の土塁基底部、溝、柱穴、柵列。	小森俊寛・南出俊彦「平安京右京一条二坊」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
9	右京一条二坊十二町	中京区西ノ京円町19-5	平安時代の柱穴、溝。	長戸満男「右京一条二坊十二町」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
10	右京一条二坊十一町	中京区西ノ京北円町2-6	平安時代の土壇、溝。室町時代の土壇、柱穴。	鈴木広司「右京一条二坊試掘調査」『京都市内遺跡試掘・立会報告 昭和54年度』京都市文化観光局文化財保護課 1980年



図5 調査前全景



図6 作業風景

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要

基本層序は、表土下約30cmまでが現代盛土で、その下に約10cm程の近世以降の整地層があり、以下は黒褐色砂泥層・にぶい黄褐色砂泥層の地山となる。その下層には2次堆積した火山灰がブロック状に入ったにぶい黄褐色泥土層が調査区のほぼ全体に広がっている。ただ、調査区東部の一部には近世整地層の下に約10cm程度の薄い中世の遺物包含層がみられた。

各時代の遺構は、いずれも地山面で検出している。検出した遺構は、9世紀後半から10世紀中頃の掘立柱建物・柵・土塋などで、遺構の変遷から大きく3期に分けることができる。第1期の遺構には建物1・5・6、柵3、第2期には建物2・3、柵1、土塋23・235・300、第3期には掘立柱建物4、柵2などがある。また、調査区の西部や南東部には風倒木の痕跡がみられた。

(2) 第1期の遺構

建物1（図9、図版2-1） 調査区北側の西寄りで検出した東西5間（12m）の掘立柱建物である。身舎南側柱と南庇を検出した。建物の北側は調査区外に延びる。身舎にあたる柱穴は5基

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代中期前葉	建物1・5・6、柵3	
平安時代中期中葉	建物2・3、柵1、土塋23・235・300	
平安時代中期後葉	建物4、柵2、土塋257	
鎌倉時代～室町時代	包含層	

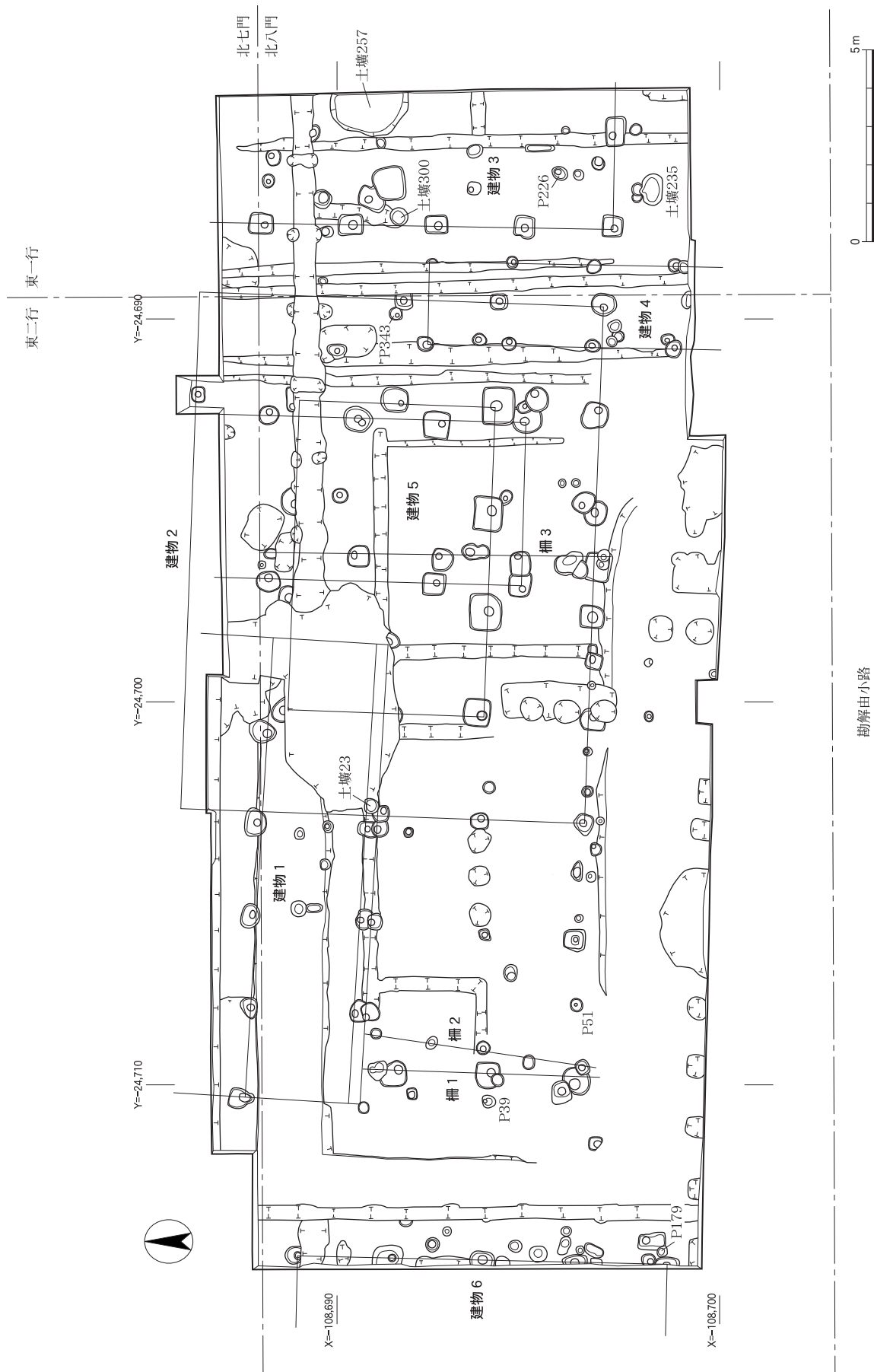
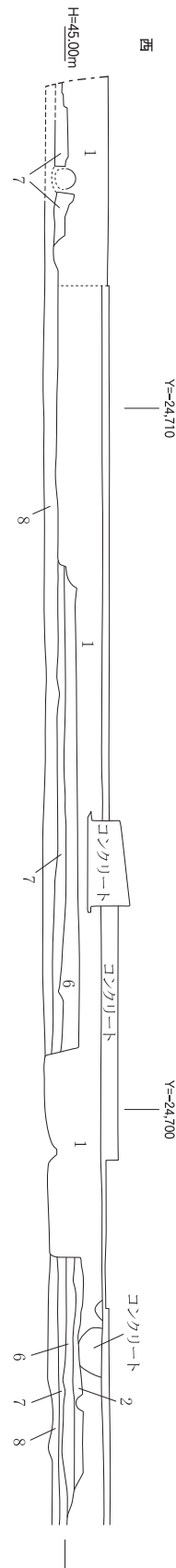
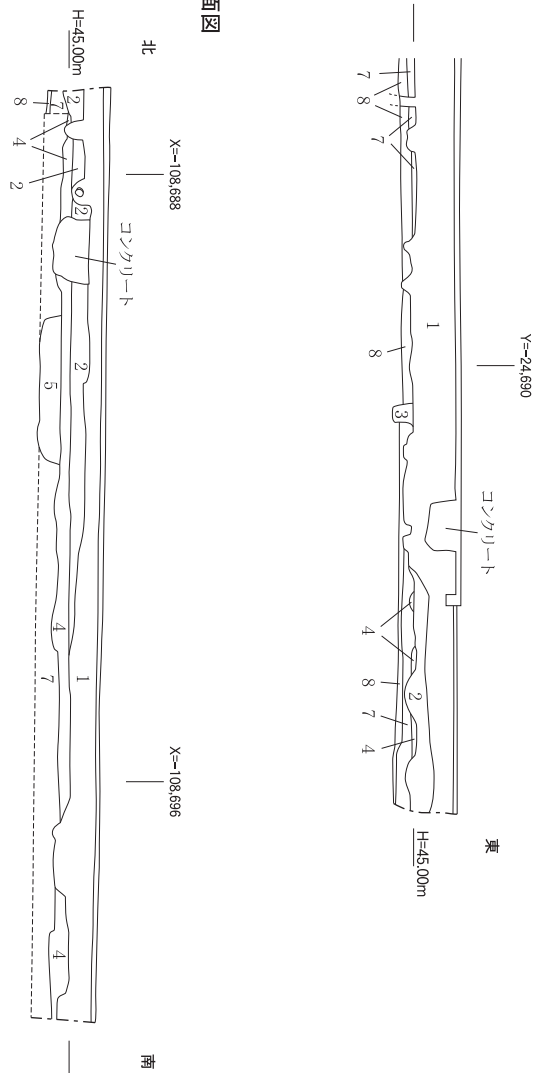


図7 調査区遺構平面図 (1 : 150)

北壁断面図



東壁断面図



- 1 盛土
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、礫混 (近世礫地層)
- 3 10YR4/1~4/2 灰黄褐色砂泥、炭・小礫少量混 (近世溝254)
- 4 10YR3/4 黒褐色~暗褐色砂泥、土器片混 (中世包含層)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥、土器片・炭含 (土壇257)
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥 (地山)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (地山6と同質)
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色泥土+2.5Y5/3 黄褐色泥土、火山灰ブロック混 (地山)



図8 調査区北壁・東壁断面図 (1 : 100)

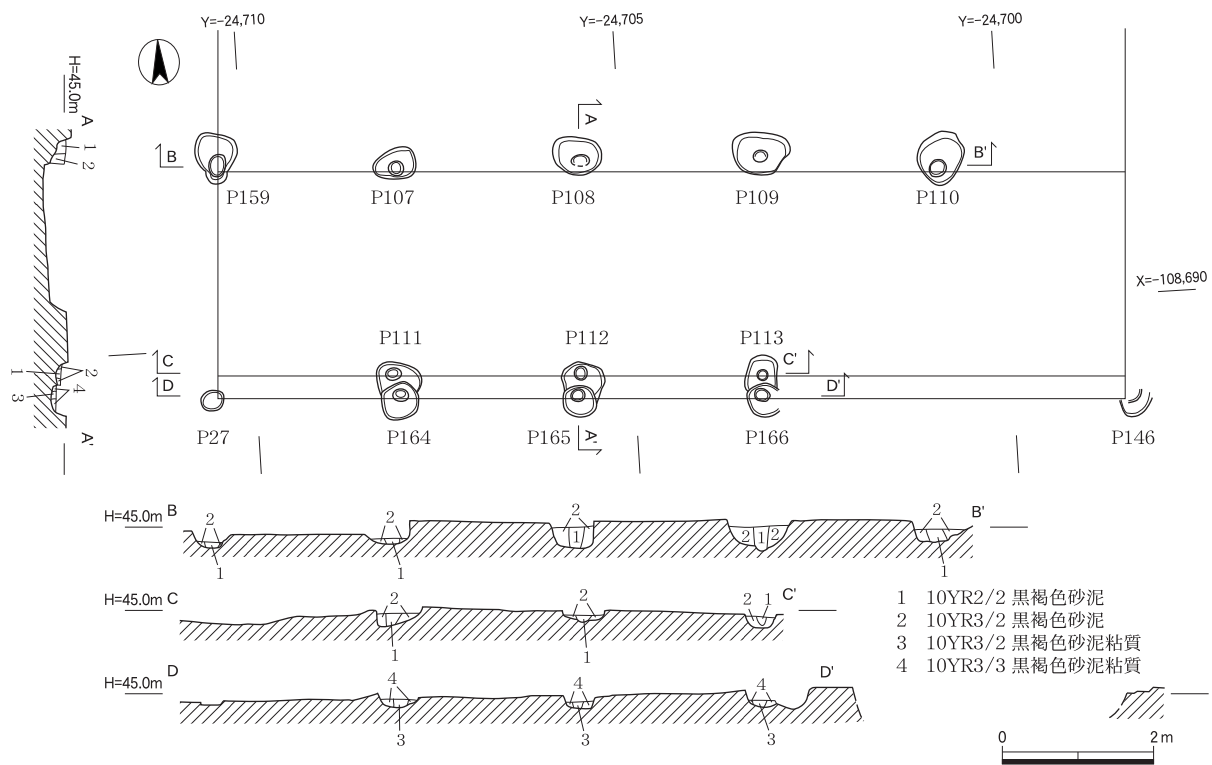


图9 建物1実測図（1：100）

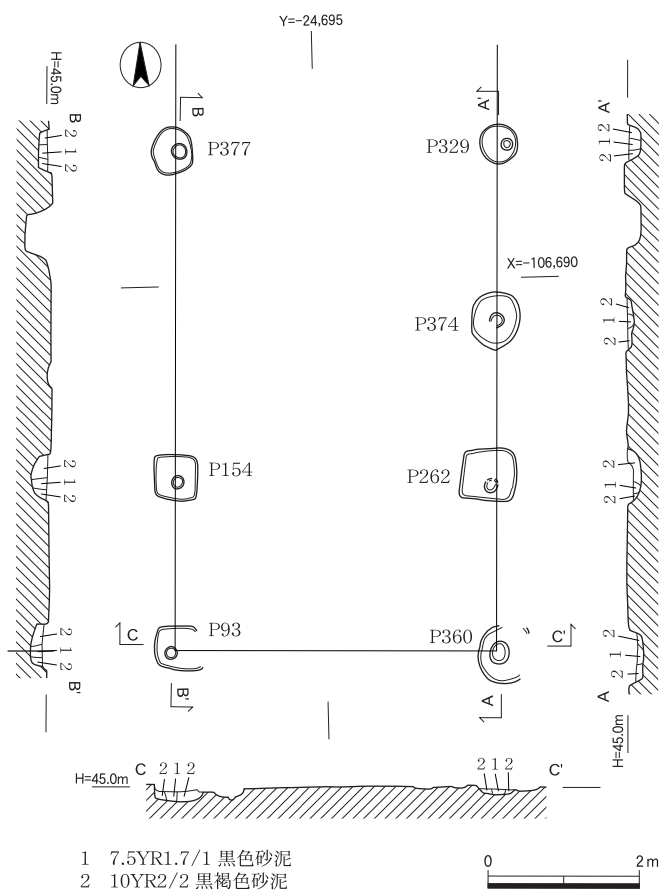


图10 建物5実測図（1：100）

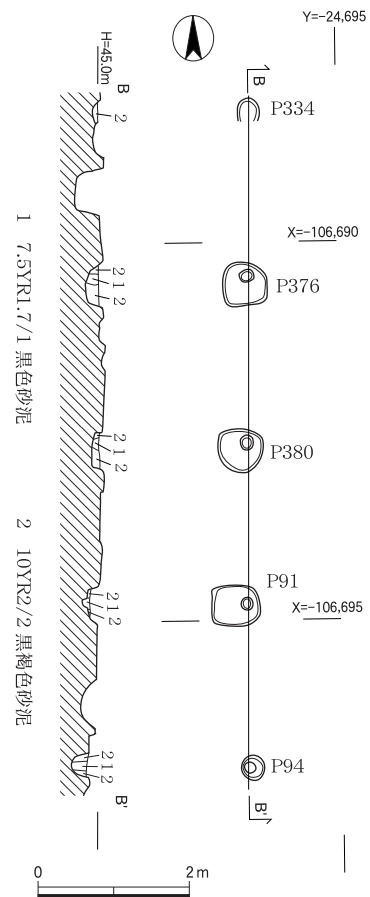


图11 柵3実測図（1：100）

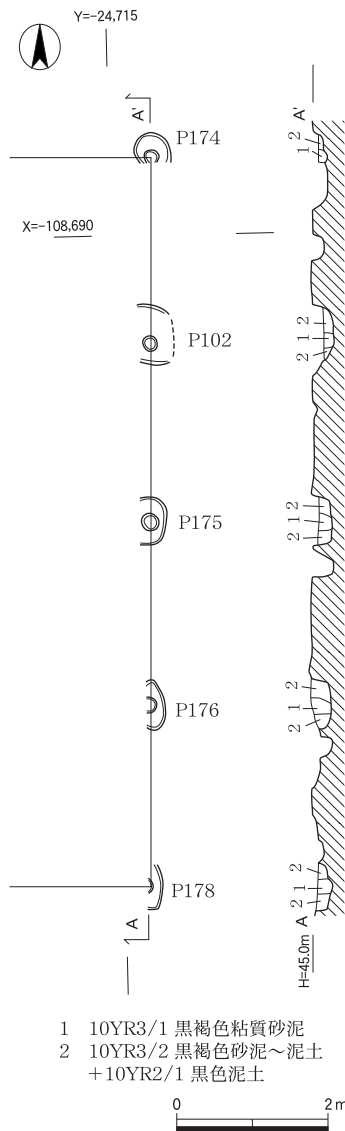


図12 建物6実測図（1：100）

（P159・107・108・109・110）で、掘形は一辺が50～60cmの隅丸方形を呈する。柱当りの規模は径約20cm、深さ45cm。桁行は2.4m等間である。身舎の柱列は、東二行の北七門と北八門の境界線上に位置している。底部分にあたる柱穴には新旧があり、P111・112・113がP164・165・166にそれぞれ建て替えられている。庇の出は2.7mから3mに延ばしている。掘形は一辺が40～50cmの隅丸方形。柱当りの規模は径約15cm、深さ15～20cm。平安時代前期末から中期初頭の土師器皿・高杯・甕、黒色土器碗などの小片が柱穴から出土している。

建物5（図10、図版3-1） 調査区中央部で検出した東西1間（4.2m）×南北3間（6.6m）以上の掘立柱建物である。建物の北側は調査区外に延びる可能性がある。柱穴は7基（P377・154・93・360・262・374・329）検出した。掘形は一辺が約60cmの隅丸方形。柱当りの規模は径約15cm、深さ20～30cm。梁間は4.2m、桁行は2.2m等間である。遺物は平安時代前期末から中期初頭の土師器皿・碗、緑釉陶器碗などの小片が柱穴から出土している。

建物6（図12、図版3-3） 調査区西端部で検出した南北4間（9.6m）の柱列である。柱穴の配置・規模・形状などから調査区外へ延びる建物と推定した。柱穴は5基（P174・102・175・176・178）検出した。掘形は一辺が60～70cmの隅丸方形。柱当りの規模は径約15cm、深さ25cm。桁

行は2.4m等間である。平安時代前期末から中期初頭の土師器皿、須恵器碗、黒色土器甕などが柱穴から出土している。

柵3（図11、図版3-1） 調査区中央部で検出した南北4間（8.8m）以上の柱列である。柱穴は5基（P334・376・380・91・94）検出した。掘形は一辺が約60cmの隅丸方形。柱当りの規模は径約15cm、深さ20～30cm。柱間は約2.2m等間である。遺物は平安時代前期から中期初頭の土師器皿、須恵器蓋が柱穴から出土している。

（3）第2期の遺構

建物2（図13、図版1-1） 調査区北側の西寄りで検出した東西5間（13.5m）×南北4間（10.5m）の掘立柱建物である。身舎が東西3間（8.1m）×南北2間（5.1m）で、四面に庇（2.7m）がつく。柱穴は21基検出した。そのうち身舎にあたる柱穴は10基（P55・139・131・152・379・357・372・330・332・335）である。掘形は一辺が約80cmの隅丸方形。柱当りの規

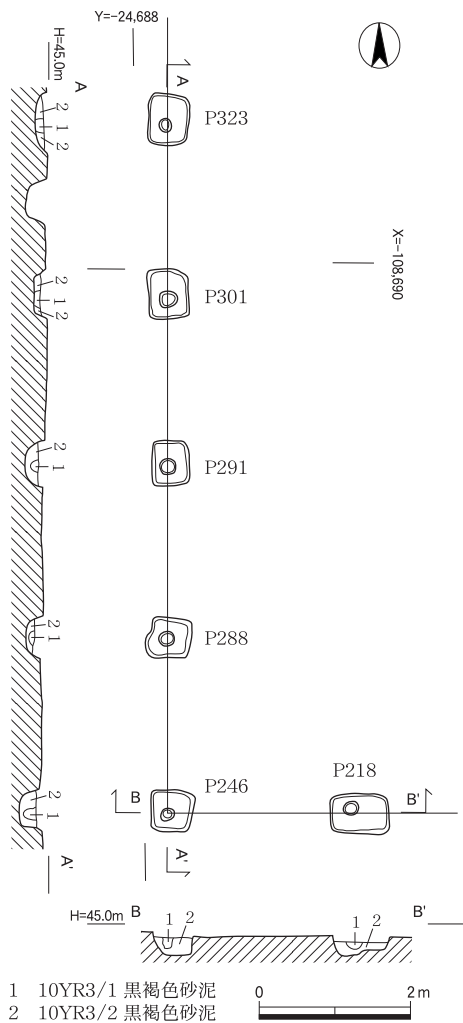


図14 建物3実測図 (1 : 100)

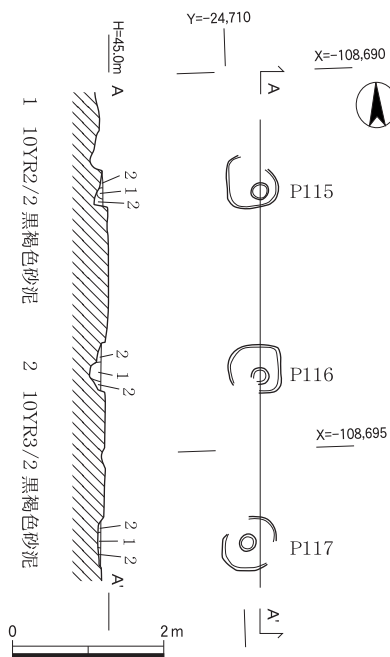


図15 柵1実測図 (1 : 100)

模は径約20cm、深さ45cm。梁間は2.55m等間、桁行は2.7m等間である。底部分の柱穴は11基 (P125・126・127・128・129・130・368・350・306・345・394) である。掘形は一辺が50～60cmの隅丸方形。柱当りの規模は径約15cm、深さ30cm。北側の底部分は調査区を一部拡張し、身舎の東側柱列の延長線上で確認した。平安時代前期末から中期中葉の土師器皿・杯・碗・甕、須恵器蓋・壺などが柱穴から出土している。

建物3 (図14、図版2-2) 調査区東側で検出した東西1間 (2.4m) 以上×南北5間 (9m) 以上の掘立柱建物である。建物の北側と東側は共に調査区外に延びる。柱穴は6基 (P323・301・291・288・246・218) 検出した。掘形は一辺が50～80cmの隅丸方形。柱当りの規模は径約15cm、深さ20～30cm。桁行は約2.25m等間である。平安時代前期末から中期中葉の土師器皿・須恵器鉢の小片が柱穴から出土している。

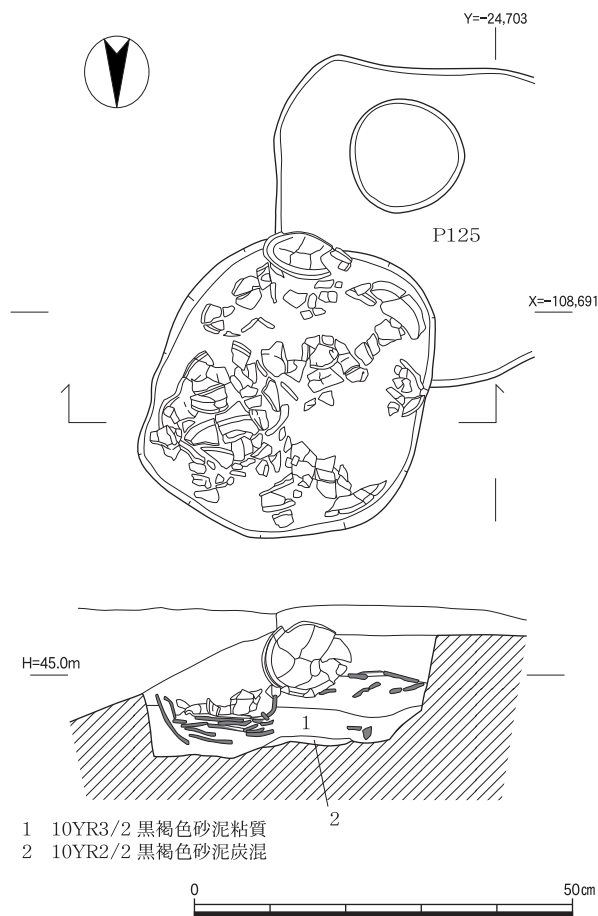


図16 土壌23実測図 (1 : 10)

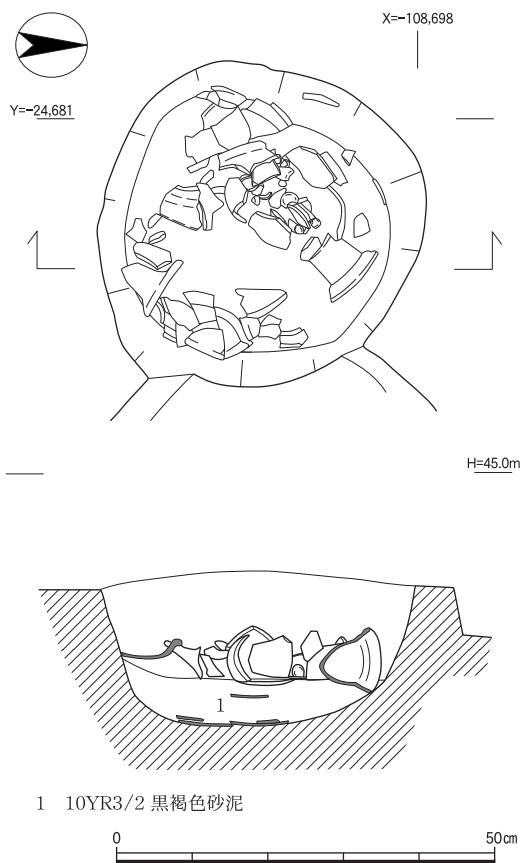


図17 土壌235実測図（1：10）

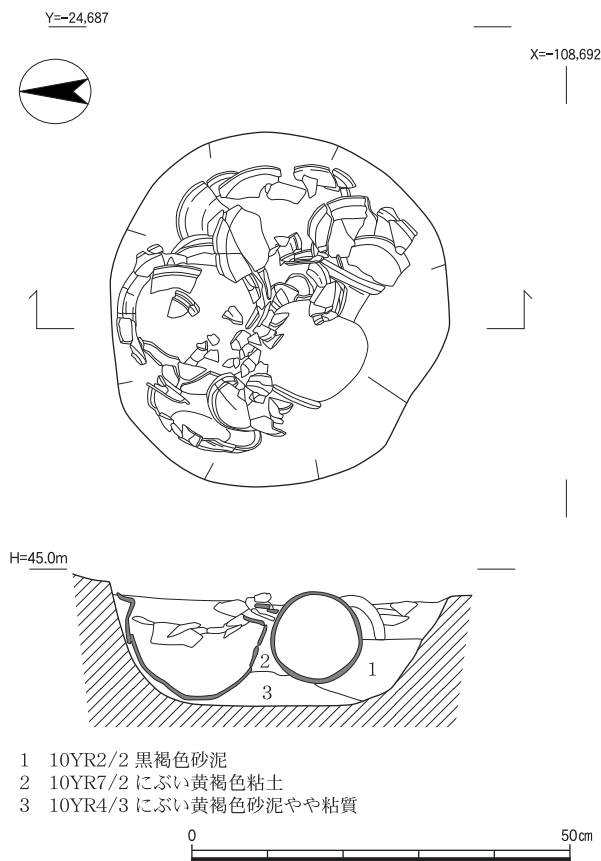


図18 土壌300実測図（1：10）

柵1（図15、図版4-1） 調査区西部で検出した南北2間（4.8m）の柱列である。他に対応する柱穴がなく、柵と考えた。柱穴は3基（P115・116・117）検出した。掘形は一辺が約60cmの隅丸方形。柱当りの規模は径約20cm、深さ20～30cm。柱間は2.4mである。平安時代前期から中期中葉の土師器皿などの小片が柱穴から出土している。

土壌23（図16、図版4-2） 調査区中央部の北寄りで検出した。掘形は一辺約40cmの隅丸方形で、深さ約15cm。建物2の底部西側柱穴P125と重複しており、柱穴P125の掘形の一部を壊した状態で検出した。西側は攪乱をうけている。平安時代中期中葉の土師器皿・甕、須恵器壺が出土している。土師器甕は口縁部を上に向けて据えられていたが、口縁部は破損し、大小の破片となって出土した。土師器皿は破片が土壌全体にひろがっているが、内面を土師器甕に向けて直立した状態で出土しているものもあった。須恵器壺は口縁部の小片が埋土中から出土している。

土壌235（図17、図版4-3） 調査区南東部で検出した。掘形は一辺が約45cmの隅丸方形で、深さ20cm。土壌の上部は削平をうけている。平安時代中期中葉の土師器皿・甕、須恵器壺が出土している。須恵器壺は横になった状態で出土し、体部は破損している。土師器甕は須恵器壺の東横で口縁部が破損した状態で出土している。土師器皿は破片が須恵器壺の底部と土師器甕の周囲に散在していた。

土壌300（図18、図版4-4） 調査区北東部で検出した。掘形は一辺約45cmの隅丸方形で、深さ15cm。平安時代中期中葉の土師器甕、須恵器壺が完形で残っており、土師器皿も出土している。

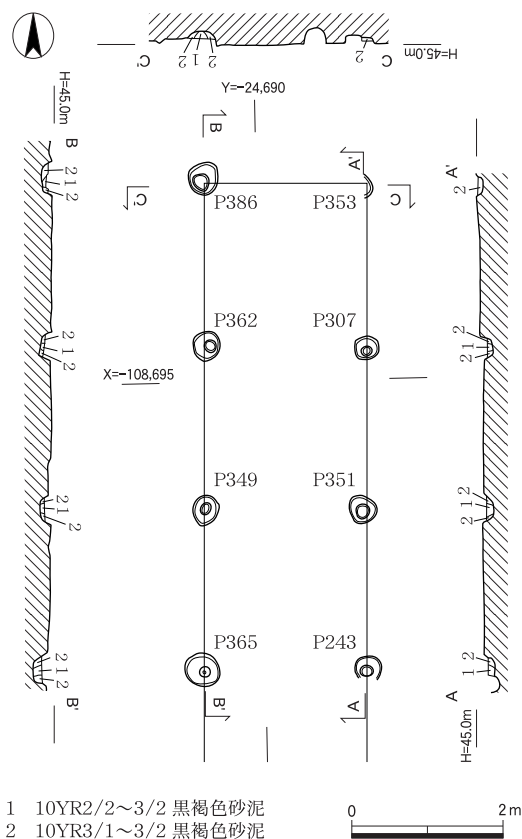


図19 建物4実測図（1：100）

須恵器壺は土壌235と同様に横になった状態で出土している。土師器甕は土壌23と同様に、口縁部を上に向けて据えられていた。土師器皿は、土師器甕と須恵器壺を囲むようにして、内面をむけた状態で出土しているものもある。遺物は上述した土壌23・235に比べて良好に遺存していた。

上記の土壌3基は、いずれも埋納遺構と考えられる。

（4）第3期の遺構

建物4（図19、図版3-2） 調査区南東部で検出した東西1間（2.1m）×南北3間（6.3m）以上の掘立柱建物である。建物の南側は調査区外に延びる。柱穴は8基（P365・349・362・386・353・307・351・243）検出した。掘形は径35～40cmの円形。柱当りの規模は径約15cm、深さ20cm。桁行は2.1m等間である。平安時代

中期後葉の土師器皿・杯、須恵器杯・壺などが柱穴から出土している。

柵2（図20、図版4-1） 調査区西部で検出した南北4間（5.6m）以上の柱列である。北側で東に約10度振る。柱穴は5基（P163・31・168・42・121）検出した。掘形は一辺が約30cmの隅丸方形。柱当りの規模は径約15cm、深さ25～30cm。柱間はやや不揃いであるが約1.4mである。遺物は平安時代中期後葉の須恵器鉢、灰釉陶器皿の小片が柱穴から出土している。

土壌257 調査区東壁付近で検出した半円形の土壌で、東側は調査区外に延びる。径約2.0m、深さ0.3m、埋土は黒褐色砂泥。中世の遺物包含層直下から検出している。土壌の性質は不明であるが、廃棄土壌の可能性も考えられる。出土した遺物には土師器皿・羽釜、須恵器甕、黒色土器碗、白色土器碗、灰釉陶器碗・皿などがある。

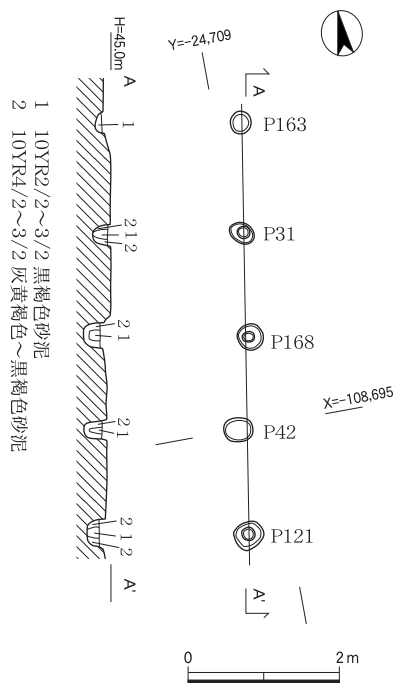


図20 柵2実測図（1：100）

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱で28箱出土している。出土遺物の大半は平安時代前期から中期の土器類である。³⁾平安時代前期の遺物は土師器皿・椀・高杯、緑釉陶器椀・皿などが出土しているが、そのほとんどが小片である。平安時代中期の遺物は土師器皿・杯・甕、須恵器壺・椀、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀などが出土している。平安時代後期の遺物は少なく、須恵器甕などが出土している。中世の遺物は土師器皿、須恵器鉢、瓦器椀、輸入青磁皿などが中世の遺物包含層から出土した。また近世の遺物は染付椀、施釉陶器甕などが攪乱土層から出土した。

(2) 出土遺物

遺存状態が良好な一括資料があるので、ここでは遺構別に出土遺物をみていくことにする。次の3基の土層からは、いずれも平安時代中期中葉の土器が一括で出土してゐる。

土層23出土遺物 (図21、図版5) 土師器皿・杯・甕、須恵器壺が出土している。接合しない破片もあるが、土師器皿12枚を確認している。土師器杯・甕は各1個体が出土した。土師器皿は大中小の3種類がある。口径が11.1～11.6cm、器高1.3cm前後の小型のもの(1～3)と、口径が14.2～15.7cm、器高2.1～2.3cm前後の中型のもの(4～7)、口径が17.0cm、器高2.0cmある大型のもの(8)で、いずれも薄手で口縁部につよいナデを施す、いわゆるての字状口縁をもち、体部には指頭圧痕がみられる。淡橙色～にぶい橙色を呈し、胎土は緻密である。土師器杯(9)は口径が19.4cm、器高2.7cmで口縁部につよいナデを施し、体部には指頭圧痕がみられる。にぶい橙色を呈し、胎土は緻密である。土師器甕(10)は口径が19.6cm、残存器高は6.6cm。器壁は薄く、口縁部を折り曲げている。肩部から下の外面は押圧痕があり、内面にはハケ目痕がみえる。にぶい黄橙色を呈し、胎土は小礫を少量含むがおおむね緻密である。他には須恵器壺の口縁が出土しているが小片で図化できなかった。

土層235出土遺物 (図22、図版5) 土層23と同様に、土師器皿・杯・甕、須恵器壺が出土して

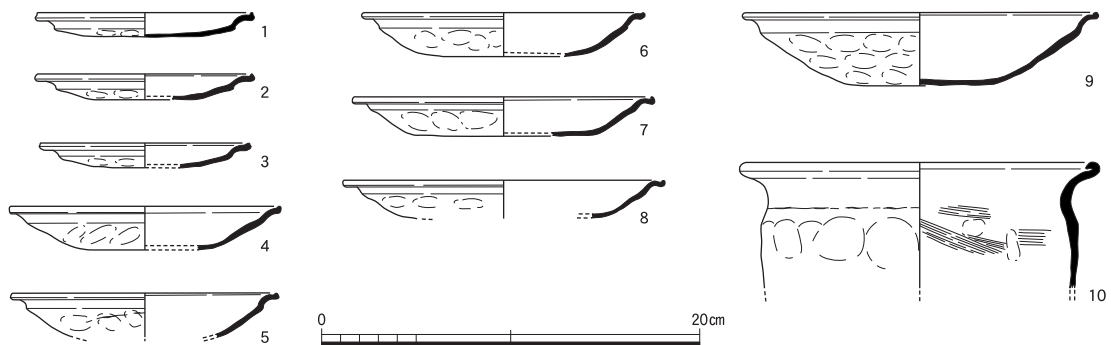


図21 土層23出土土器実測図(1:4)

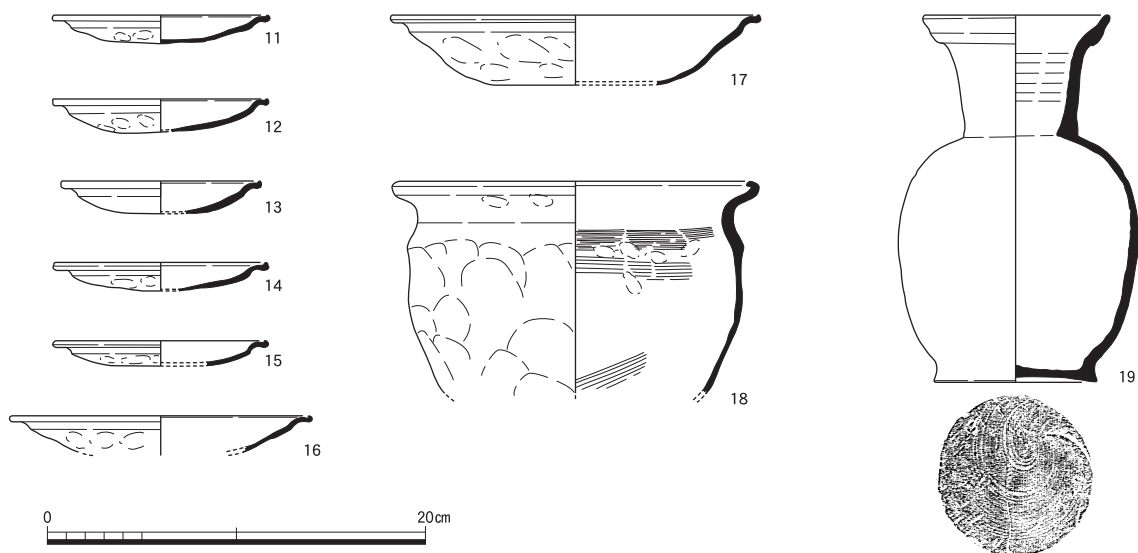


図22 土壙235出土土器実測図（1：4）

いる。接合しない破片もあるが、土師器皿5枚を確認している。土師器杯・甕、須恵器壺は各1個体が出土した。土師器皿は中小の2種類あり、口径が10.5～11.3cm、器高1.3cm前後の小型のもの（11～15）と、口径が15.9cm、器高1.9cmの中型のもの（16）で、1～8と同様の調整のものである。にぶい橙色～褐灰色を呈し、胎土は緻密である。土師器杯（17）は口径が19.5cm、器高3.8cmあり、9と同じ調整がみられる。にぶい橙色を呈し、胎土は緻密である。土師器甕（18）は口径が19.4cm、残存器高は11.2cm。10と同様の調整を施している。外面の一部には煤の付着がみられるがにぶい橙色を呈し、胎土は緻密である。須恵器壺（19）は口径9.8cm、器高19.4cmある。横方向のナデ仕上げで頸部が外に開き、口縁は段をもってさらに外反する。底部は未調整で糸切り痕が残る。灰色を呈し胎土は緻密で軟質。また、須恵器壺の内部からは銭貨、表面を磨いた土製の玉を数個発見している。銭貨は劣化が激しく、種類の特定制や枚数の確認はできていない。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器	10箱	土師器1点、須恵器3点、黒色土器1点	10箱	0箱
平安時代中期	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土製玉、銭貨	17箱	土師器39点、須恵器4点、灰釉陶器3点、緑釉陶器9点、土製玉5点、銭貨一括、粒状不明品一括	14箱	0箱
平安時代後期	土師器	0箱	土師器1点	0箱	0箱
平安時代末期～室町時代	土師器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器	1箱		0箱	1箱
江戸時代	施釉陶器、染付	3箱		0箱	3箱
合計		31箱	68点（3箱）	24箱	4箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

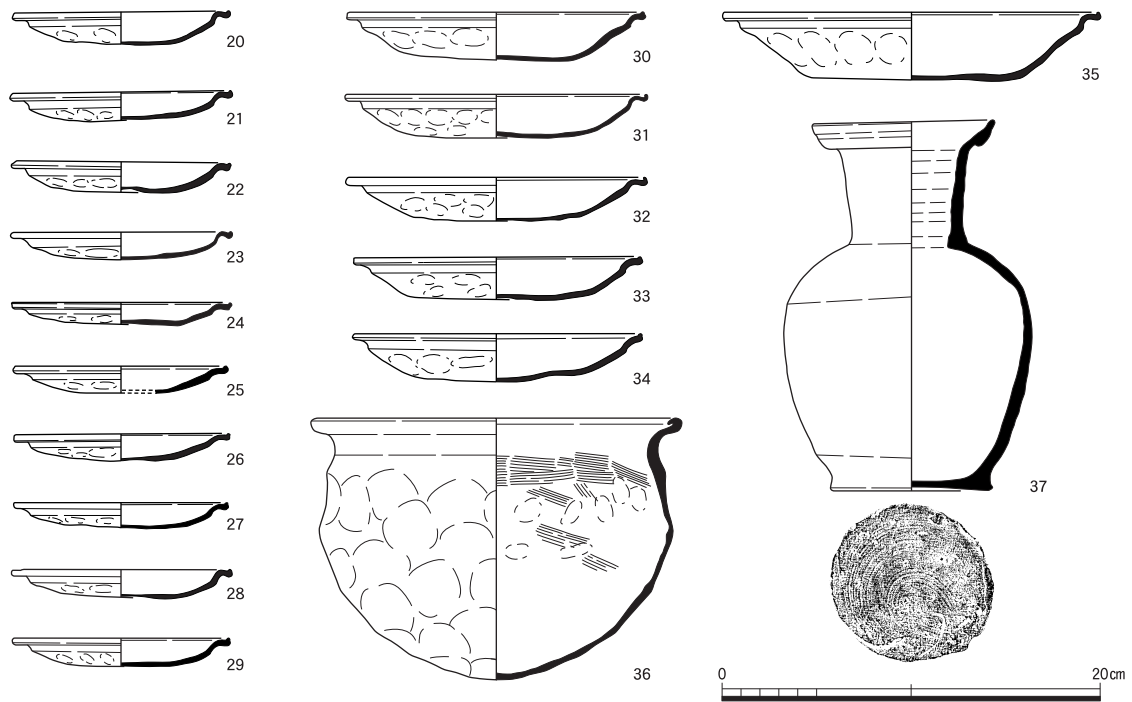


図23 土壙300出土土器実測図（1：4）

土壙300出土遺物（図23・24、図版6） 上記の土壙2基と同様に、土師器皿・杯・甕、須恵器壺が出土している。接合しない破片もあるが、土師器皿17枚を確認している。土師器杯・甕、須恵器壺は各1個体が完形で出土している。土師器皿は中小の2種類あり、口径が11.2～11.6cm、器高1.2cm～1.8cmの小型のもの（20～29）と、口径が15.4～16.0cm、器高2.3～2.5cmの中型のもの（30～34）で、1・8・11～16と同様の調整のものである。にぶい橙色～褐灰色を呈し、胎土は緻密である。土師器杯（35）は完形で出土し、口径が19.7cm、器高3.7cmあり、9・17と同じ調整がみられる。にぶい橙色を呈し、胎土は緻密である。土師器甕（36）は口径が19.6cm、器高は13.8cm。10・18と同様の調整を施している。にぶい橙色を呈し、胎土は緻密である。須恵器壺（37）は口径9.7cm、器高19.6cmで、調整は19と同様である。灰色を呈し胎土は緻密で軟質である。土師器甕内部の土中からは、中空で外面は暗褐色、内面が黒色の径1～1.5mmの粒状のものを19個検出した（68）。また、須恵器壺内部の土中には、表面を堅くまるめた土製の玉が5個納められていた（62～66）。それぞれ径2.3～3.0cmの不揃いな玉子形をしている。使われている土は、調査地の地山で確認している火山灰層⁴⁾と同質のものである。また、最後の皇朝十二銭である乾元大宝（初铸958年）も納められていた（67）。12枚は確認できたが全体に損傷が著しく、実測・拓本などの図化はできなかった。破片総重量を計測すると65.4gあり、完形に近い3枚の平均重量は2.0gである。単純に計算してみると32枚以上が納められていたことになる。その他には樹木の小片と葉も入っていた。樹木は板状で針葉樹のもので、葉は全縁でやや革質であり、常緑広樹の可能性はある。



図24 土師器甕内検出の粒状不明品

その他の遺構出土遺物（図25） ここで特に時代を記述していない遺物は、すべて平安時代中期のものである。

建物2の柱穴P345・55からは、宝珠つまみをもつ平安時代前期（9世紀後半）の須恵器の蓋（38・39）が出土している。建物3の柱穴P246からは貼付け高台をもつ灰釉陶器碗（40）が出土している。建物4の柱穴P349からは底部に糸切り痕が残る須恵器壺（41）が出土している。建物6の柱穴P175からは土師器皿（42）が出土している。柵1の柱穴P116からは黒色土器甕（43）が出土している。外面には煤が付着し、内面はハケメ調整。柵2の柱穴P31からは緑釉陶器碗（44）が出土している。内面はミガキ調整し、底部に沈線がみられる。柱穴P39からは土師器皿（45）、須恵器杯B（46）が出土している。45は平安時代後期、46は平安時代前期（9世紀後半）のものである。柱穴P51からは軟質の須恵器鉢（47）が出土している。建物1の柱穴P146からは平安時代前期（9世紀後半）の土師器碗（48）が出土している。外面はミガキ調整し、内面はナデを施す。土壇257からは土師器皿・杯（49・50）、緑釉陶器碗（51・52）が出土している。51は削り出し高台をもつ。52は硬質で貼付け高台と底部に糸切り痕があり、美濃か近江産と思われる。柱穴P179からは灰釉陶器碗（53）が出土している。貼付け高台で内面に灰釉がみられる。柱穴P226からは緑釉陶器碗（54）が出土している。硬質の無釉陶器で、内面にミガキ調整が施されている。柱穴P343からは緑釉陶器碗（55）が出土している。軟質で貼付け高台と底部に糸切り痕があり近江産であろう。56～61は遺構精査中に出土した。56は硬質の無釉陶器で、内面にミガキ

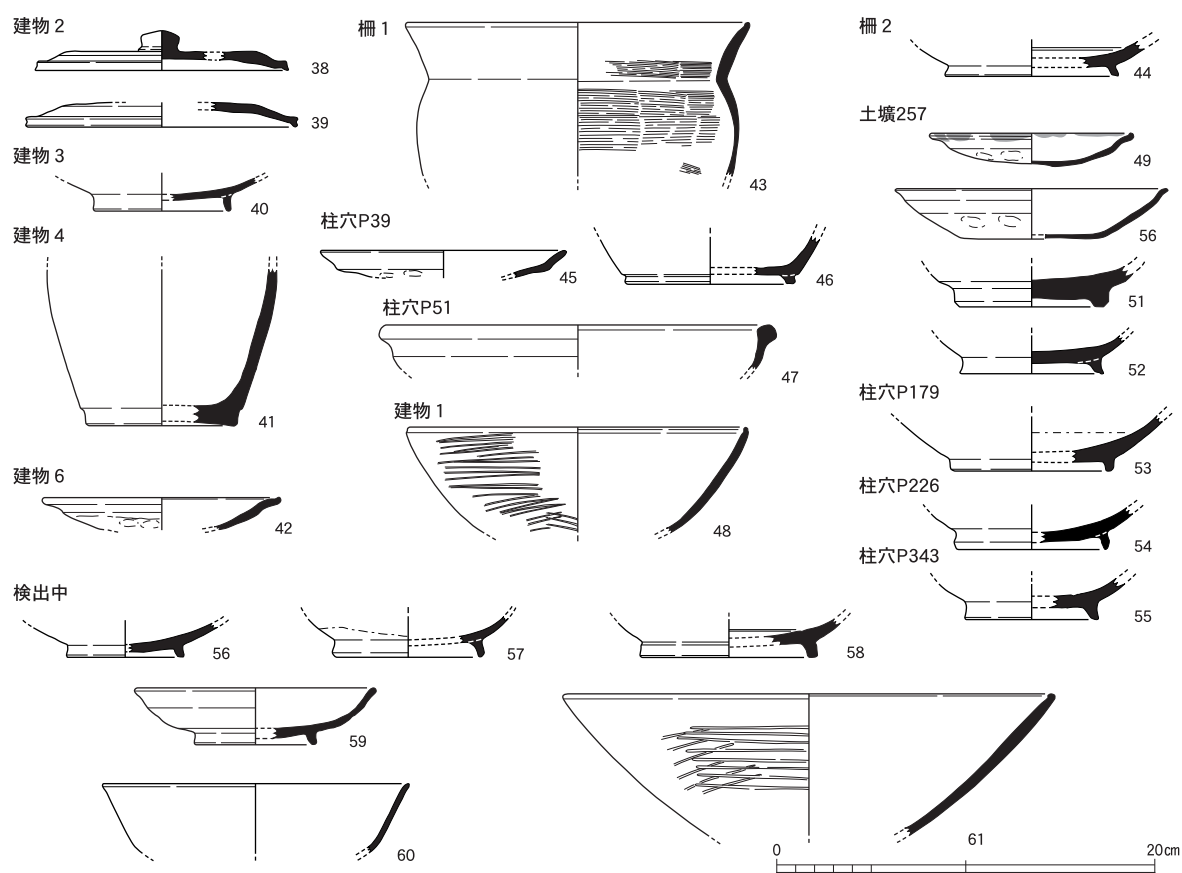


図25 その他の遺構出土土器実測図（1：4）

調整が施されている。57は灰釉陶器碗で、釉のつけかけ痕がみえる。58は軟質の緑釉陶器碗である。59は緑釉陶器碗で、近江産の底部に糸切り痕が残るものである。60は緑釉陶器碗で、貼付け高台をもつ、近江産のものであろう。61は土師器杯Bで、外面にミガキを施し、内面はナデ調整している。平安時代前期（9世紀後半）のものである。

5. ま と め

検出した遺構は、造られた時期差はあるものの、平安時代の中期（9世紀後半から10世紀後半）の範疇におさまる。

建物1は、建物2と重複関係から建物2より先行する。建物5も同じく建物2と柱穴が重複しており、建物5が先行する。西側で検出した建物6も、柱穴の配置や規模、出土遺物などから建物1や建物5と同時期のものと推定した。建物5の位置には、柵3への変更がみられる。この一群を第1期とする。

建物2と建物3および柵1は、南端が揃うことや出土遺物などから、同時期に計画性をもって造られたと考えられる。四面に庇をもつ規模の大きい建物2が造られた時期は、柱穴の規模や形状、出土遺物などから平安時代中期中葉に建てられていた可能性が強い。平安時代中期中葉の土器が出土している土壌23と重複関係からは建物2が古いことになる。しかし、土壌23と土壌300が建物2の東西方向の中央軸線の延長線上に位置していること、土壌300と土壌235は建物3の柱筋に近接していることにも注目したい。土壌23と土壌300は建物2、土壌235は建物3に伴う地鎮のために造られた土壌である可能性も考えられる。この平安時代中期中葉の一群を第2期とする。

建物4は、建物2と柱穴が重複しており、こちらのほうが新しい。また建物3との間隔が狭すぎることで、柱穴の形状が他の建物と異なることから建物2と建物

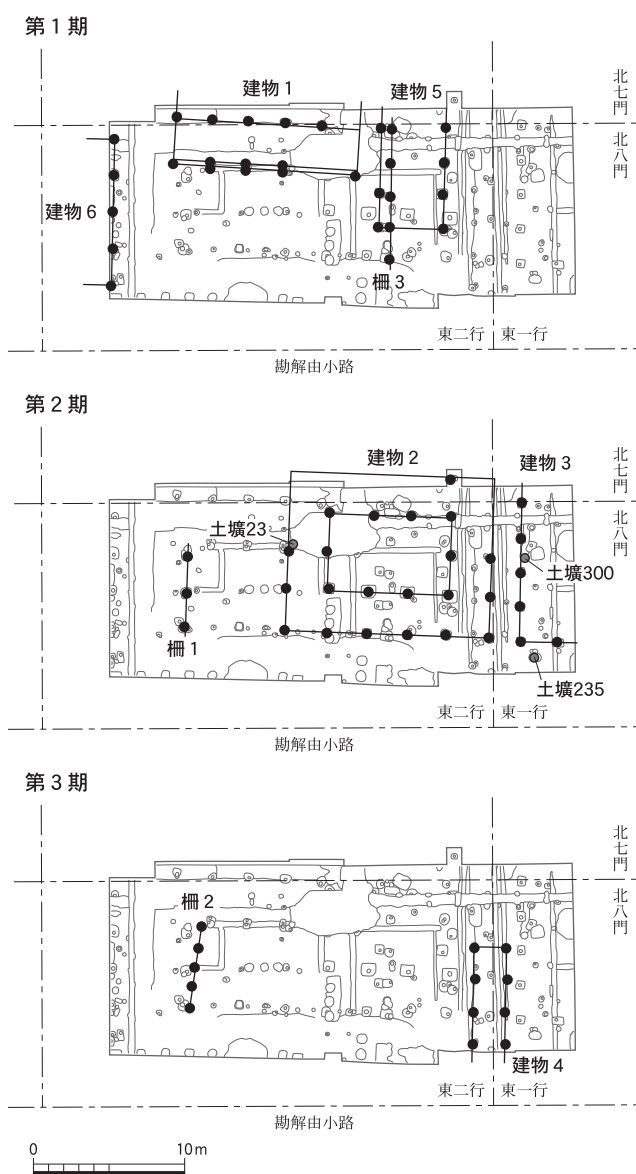


図26 建物変遷模式図（1：500）

3の廃絶後に建てられたと推定した。また柵2は、柵1と柱穴が重複しており、こちらのほうが新しいことから第2期以降のものと思われる。この一群を第3期とした。

このことから当該地は平安時代中期に少なくとも3時期にわたる宅地利用が行われていたことが判明した。

第1・2期の建物群は、「四行八門」の区画境を越えて造られている建物1や、総庇付きの建物2が検出されたことなどから、少なくとも1町の八分の一以上を有する邸宅跡であったと考えられる。ただ、出土した遺物などからは、この邸宅の住人の名前や官職などが判明するものは認められなかった。邸宅の規模の全容や所有者に関しては今後の調査を待ちたい。

当該地の土地利用の変遷については、中世の整地跡と思われる包含層が調査区の一部に残っていたが、現代整地層による削平をうけており、平安時代中期以後の遺構の確認はできなかった。周辺の調査で明らかなように平安京右京域と同様に過疎化していった可能性も充分考えられる。

なお、地表面から約1m下で火山灰ブロックを含んだ層を検出している。この火山灰は亀ノ甲⁵⁾形火山ガラスを含んでおり、約2万6千年以上前の鹿児島⁵⁾の始良火山のものと思われる。

註

- 1) 京都市編「第8巻 中京区」『史料 京都の歴史』 平凡社 1985年
- 2) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』 京都市文化観光局 1992年
- 3) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』 (有) 京都編集工房 2005年
- 4) 『新編 火山灰アトラスー日本列島とその周辺』 財団法人 東京大学出版会 1992年
- 5) 註4と同じ

図 版

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいあんきょううきょういちじょうさんぼうさんちょうあと							
書 名	平安京右京一条三坊三町跡							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2 0 0 6 - 2 1							
編 著 者 名	能芝妙子							
編 集 機 関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発 行 年 月 日	西暦2007年 3 月20日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 いちじょうさんぼうさんちょう 一条三坊三町 あと 跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしきょうおおいご 西ノ京大炊御 もんちょうちない 門町地内	26100		35度 01分 12秒	135度 43分 46秒	2006年10月 12日～2006 年12月22日	約392m ²	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京右京 一条三坊三町 跡	都城跡	平安時代中期		建物、柵、土壇		土師器、須恵器、灰釉 陶器、緑釉陶器、銭貨、 土製玉		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-21

平安京右京一条三坊三町跡

発行日 2007年3月20日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961